図書館友の会 ニュース

2022年
1月号
No. 21

発行 岸和田市図書館友の会 《発行責任者 松谷 敬一》

新年 明けましておめでとうございます

岸和田市図書館友の会 会長 松谷 敬一

コロナウイルスに悩まされてちょうど2年を迎えますが、皆さんはお元気でお過ごしでしょうか。世界全体がパンデミック状態で感染防止に苦慮しながら、経済を前に推し進めようと頑張っている矢先に、オミクロン株が出現。各国の政府も身構えています。

しかし、政治・経済の話はさて置き、私たちの役割は「図書館友の会」を通じたボランティア活動にあります。コロナ禍で大変でしたが、昨年も私たちは例年通りの実績を残すことができました。今年も周りの現象に左右されず、これまで進めてきた行事を一つひとつていねいに実施して行きたいと思っていますので、よろしくお願いします。

その際の留意点は不安に負けない気力と健康です。「図書館友の会」の目標は、市民の皆さんといっしょになって生涯学習活動を楽しく進めていくことです。会員の皆さんも楽しく明るくがんばってゆきましょう！ どうぞ健康管理に注意されて、良い新年をお迎えください。

楽しかった文学歴史散歩 狭山池博物館と観心寺を見学

毎年恒例の図書館友の会「文学歴史散歩」を昨年11月19日(金)晴天の下、20名の参加により中型バスで大阪府立狭山池博物館と観心寺を訪問しました。新型コロナウイルス・デルタ株による第5波感染はほぼ収束していましたが、今年も感染予防を講じての実施でした。

狭山池博物館では、感染対策上4班に分かれて、ボランティアガイド4名による常設展示の案内解説と、学芸員2名による創立20周年特別展示（狭山池のルーツ：古代東アジアのため池と土木技術）の解説を受け、最後に狭山池堤に立って現地説明もしてもらいました。狭山池と一体化した博物館の展示空間に圧倒され、1時間30分の見学時間が短く感じられ、改めてじっくりと見学する必要を感じました。また、久米田池開削と狭山池改修を手掛けた奈良時代の僧・行基の力量を改めて実感する機会にもなりました。

観心寺にて

観心寺では、平安時代の初めに空海が訪れた際、境内に北斗七星を勧請したことに因む星塚を巡りながら久米田寺所蔵「星曼荼羅図（北斗曼荼羅）」を思い浮かべ、鮮やかな紅葉の中での散策時間を過ごすことができました。

「文学歴史散歩」　参加者の感想

歴史の重みを改めて感じました

好天に恵まれ心地よい暖かさの中、狭山池の大規模な修復工事の歴史や実物の木の樋、改修工事の年代の跡がわかる幅６２ｍ、高さ１５．４ｍの断面地層など、今まで見学したことのない巨大な展示物に驚かせられました。

１年ぐらいに前に児童書　中川なをみ著「水底の棺」を読み、一度「狭山池博物館」を見学したいなと思っていました。今回その機会を得ることが出来て大変嬉しかったです。

物語は平安時代末期から鎌倉時代という不安定な時代、村の水源である狭山池が泥沼に変わり果て、農作物が育たず，飢えに苦しむ中、池の修復に命をかける少年、庶民を救おうと東大寺再興という偉業を成しとげた重源上人、街角に立ち一人ひとりの魂を救おうとする蓮空を中心にした物語でした。

この物語で治水工事の大変さや、重源上人に興味をもちましたので、ボランティアガイドさんや学芸員のお話を興味深く聞くことができました。また丁寧に分かり易く説明してくださっていました。時間が短かったのは少し心残りでした。

近代建築家安藤忠夫さんのモノトーンのコンクリート建造物の中に、１０００年以上前から人々が知恵を出し合い、工夫してきた改修工事の跡が生き生きと残され、次の世代に受け継がれていくことの素晴らしさを改めて痛感しました。

観心寺は紅葉が美しく気持ちをほっとさせてくれました。空海や楠木正成の人物像について、今まで知らなかった事を色々と詳しく教えて頂きありがとうございました。

コロナ禍の中、感染予防対策に気を遣い計画された方々に心から感謝申し上げます。

（Ｔ・Ｈ）

長い歴史の中のほんの一瞬…。私もその一瞬を生きている…

安藤忠雄氏設計による狭山池歴史博物館を訪れた。

平成の大改修をきっかけに 1400 年前からの改修跡が見つかったのだ。巨大な堤の断面が展示されていた。飛鳥時代の堤の盛土やコウヤマキを使った樋管が生々しく残っており、渡来人によってもたらされた土木技術に驚いた。

鎌倉時代の重源による改修では、古墳時代の石棺が樋管として使われていた。何とも奇想天外な再利用だ。

田を潤し人の生命と財産を守ってきた治水灌漑の歴史を学んだ。

大楠公（楠木正成）像

観心寺では色とりどりの楓に色を添える山茶花、可憐な実をつけた梔子(くちなし)が出迎えてくれた。金堂の如意輪観音様にお参りし、建掛塔を右に見て奥に進み、楠公さんの首塚に手を合わせた。楠公さんの生きた時代も長い歴史の中でのほんの一瞬の出来事のようで…。そして今、私もその一瞬を生きている。空海によって勧請された星塚をめぐり霊宝館の仏様にお逢いして帰路についた。有意義な一日だった。

（俳句教室）　五嶋　久美子

図書館友の会　公開講座 「文章教室」

日 時　3月19日(土)午後1時～4時　　【参加費】 無料
場 所　岸和田市立図書館(本館) 3階視聴覚室
定 員　5名(申し込み先着順) 3月1日㈫より受付開始
図書館(本館)に直接または電話(072-422-2142)でお申し込みを。

文章教室では、**倉橋健一先生(詩人・文芸評論家)**のご指導のもと、身のまわりのこと、自分や家族のこと、あるいは親しい友人のことなど、上手い下手を乗り越えて「何でも書こう」ということで集まっています。

公開講座当日は、教室生が事前に書いてきた作品の発表を聞いて、講師の講評や合評に参加していただきます。

※当日、作品の持ち込み・発表も可能です。(400 字詰め原稿用紙 3 枚～5 枚、15 部用意ください)

地名の秘密　⑲ 先斗町(ぽんとちょう)

ポルトガル語が由来か？

先斗町という名前を聞くと年配の人は、昭和 39 年(1964)東京オリンピックの年に大ヒットした、和田弘とマヒナスターズの♪「お座敷小唄」を思い出すだろう。難解地名の一つだが、この歌で日本全国に知られるようになった。

この歌の文句の始まりが♪富士の高嶺に降る雪も、**京都先斗町**に降る雪も雪に変わりがないじゃなし、とけて流れりゃみな同じ♪……レコード板が発売当初で 250 万枚売れたという。これで誰もが「ぽんとちょう」と読めるようになった。

では何故、「先斗町」を「ぽんとちょう」と読むのだろうか。どう読んでも「先」を「ぽん」とはよめないが……。実はポルトガル語に由来するという。当初は鴨川の西側に人家が集まっていたことから、先端を意味するポルトガル語の PONTA(ポンタ)と呼ばれるようになり、それがポントに変わり「先斗」の文字をあて、「ぽんと」と読ませたのだという。

先斗町は、三条通りの一筋南から四条通りまで、鴨川と木屋町通りの間を南北に 500mほどの石畳の細い通りである。花街なのだが一般の飲食店も並び、通り東側の店は鴨川に面し、5月～9 月まで納涼床が設けられる。江戸時代初めまでは鴨川の州であったが、寛文 10 年(1670)に鴨川と高瀬川の護岸工事によって埋め立てられ、新しい町並みが出来、河原町通りに対して新河原町と呼ばれていた。正徳 2 年(1712)に水茶屋が設けられ、安政 6 年(1859)に花街としての公許が下り、明治 5 年(1872)に「鴨川おどり」が初演されると、祇園と並ぶ花街として栄えてゆく。

四条通りの入口に、京の先斗町会が立てた「京名所　先斗町」と書かれた駒札看板があり、由来が書かれている。(最近京都市が新しい看板を作成した)また一説には鴨川と高瀬川の川(皮)にはさまれた堤(鼓)にたとえてポンと音がするのをもじったという説など、諸説が伝わっている。「一度京都四条へ行かれたら、駒札を見てください」

※ 参考資料『都道府県地名の謎』ｋｋベストセラー。「駒札立て看板」
その他インターネット資料

【文責】　文章教室　浦田榮二

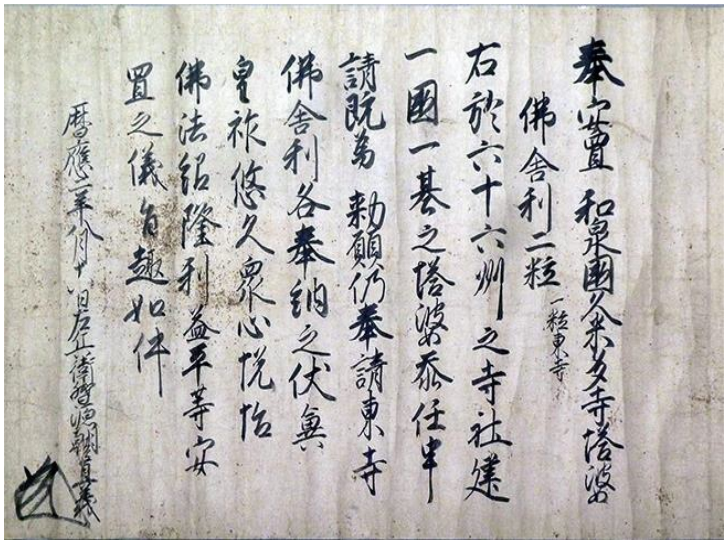
図書館友の会岸和田再発見教室　公開講演会

中世久米田寺の役割

―「久米田寺文書」を中心にして

講師：大澤　研一　氏

（大阪歴史博物館　館長）



足利直義（あしかがただよし）**願文**（がんもん）
1339 年（暦応 2 年）8 月 18 日

久米田寺は高野山真言宗の寺院で、天平 10 年（738）に行基によって創建されたと伝えられる古刹です。同寺には鎌倉時代以降の中世の古文書がまとまって伝わっており、「楠木正成書状」「足利直義願文」など 145 通が国の重要文化財に指定されています。これらは和泉国で随一の規模を誇る中世文書といえるものです。今回はそれら中世文書をもとに、中世の久米田寺の活動を和泉国全体も視野に入れつつご紹介します。

日時　2022 年 3 月 5 日（土）　14：00～16:00　《参加費無料》

場所　岸和田市立八木市民センター（池尻町）２階　講座室１

定員　70 名（申込み先着順）

※　2 月 18 日（金）　10：00 より岸和田市立図書館（本館）で受け付ます。
※　直接または電話（072-422-2142）でお申し込みください。

【主催】岸和田市図書館友の会・八木地区市民協議会・岸和田市立図書館

【後援】池尻町町会